

アンプロンプチュ (Impromptu)

— 福島と広島の声をあわせて — より

七木田 方美

I はじめに

2011年3月11日の東日本大震災による災害は、津波被害だけにとどまらず、福島原発被害、生きのびた人々の再起不能なまでの苦しみ、いまだにずっとあり続けるということ、わたしたちは、どれだけ意識しているでしょうか。

大災害時、親子の愛着は一時的に強まっていました。しかしながら、長期にわたる復旧・復興は、ストレスが日々積み重なり、そのストレスは、特に時間も手もかかる乳幼児に向けられる可能性があります。

そこで、私は災害直後から長期にわたり子育てをしながら働く母親や、乳幼児の保育をする保育者を対象に、愛着形成支援ワークショップを開催し、また、原爆2、3世のいる広島からの言葉を発信することにより、母親の心の「復旧（小さな修復）」と、「復興（しなやかな身体からの言葉の構築）」を目指すことを目的に実践活動を進めてきました。

実践活動の動機および趣旨

2011年9月25日～29日、東日本にあるヤクルト営業所のうち、被災した地区の販売会社を4件訪問しました。そこで、親子の愛着形成支援としての効果も、高齢者への効果も認められている「タッチケア」セミナーを実施しました（23年12月、日本タッチケア研究会会報誌に掲載）。セミナー受講者は、延べ数およそ200人であり、参加者は、ヤクルトスタッフと併設保育施設の保育士でした。そしてセミナーへのフィードバックとして、セミナー数日後のコメント

を頂きました。どれも、自分自身ではなく、タッチケアを他者へのいたわりに応用したいという内容でした。

災害時の確かな情報は、フェイス to フェイスの身体感覚を通した言葉が重要であるとされていますが、フィードバックコメントと一緒に送られてきた、「この出来事を風化させてはいけない」「人々の心から消え去ろうとしているが、家、家族を失った人、帰れない人など、人々の不安はどんどん募るばかり」という被災地の言葉は、今、この瞬間のその場所で生きる人々の確かな情報と考えました。

しかしながら、今回の災害について口にするのは、この先30年も40年もかかることが予測されます。また、広島での原爆投下後、原爆2世が自分は原爆2世ということと言えなかったことや、出産妊娠を恐れたことが、再現されるであろうことが、報道からも想像できました。

そこで実践活動では、他者（子どもや仲間）とかかわる自分に気づき、「人」としての有能感を獲得するために、「しなやかな身体の回復のためのワークショップ」を開催しました。また、母親自身が自らの心の言葉に気づき、言葉の宛先が必ずあることを意識した言葉のやりとりとして、「広島と福島の母親の言葉の交流」を行いました。子育てに関わる人々が、自分のストレスをうまく昇華し、かつ子どもとのよりよい愛着形成を図ることにより、心の「復旧（小さな修復）」ではなく、「復興（しなやかな身体からの言葉の構築）」を目指したのです。

ワークショップの内容は、シェルボーンムーブメントとタッチケアを融合させた、他者を意

識しながら自分を意識する内容としました。

この「和顔愛語」では、昨年からの取り組みと、今年度の取り組みについて物語った冊子「アンプロンプチュ (Impromptu)」の一部を紹介いたします。

Ⅱ アンプロンプチュ (Impromptu)

1. 「エピローグ」より

この冊子は、原発被害を受けた広島と福島で子どもの命を守り、命をつなぐ女性を中心に、お話を聴かせて頂いたり、綴っていただいたりした「声」を中心に編集しています。

なぜ子どもではなく母親の声を集めようとしたのかは、4つの理由があります。

ひとつは、どのような時でも、母親はじぶんがどうふるまえば家族が幸せになるかを考え、声に出すよりも言葉を飲み込んでしまうからです。

二つめは、広島で原爆被害に遭った人々の多くが、何も語れず、むしろあえて語らずに逝ってしまい、子どもたちが大人になったいま、話を聴いてあげたかったと後悔しているからです。

三つめはわたし自身の阪神淡路大震災の経験から、そしてもうひとつは、広島で起きた惨禍による苦しみ、カタチを変えながら世代を超えてあり続けていることを知ったからです。

阪神淡路大震災のできごと

神戸で視覚に障害のある子どもや、特別な支援の必要な子ども達の先生をしていたとき、阪神淡路大震災に遭いました。未だにトラックやヘリコプターのごう音による振動に、地震ではないかときゅっと身構えています。ベッドのわきには、何があっても動けるように運動靴がしまっておりあります。

そのときのできごとをふり返り、涙を流せたのは「きょうで8年です」という鎮魂の鐘の音をテレビできいたときでした。すやすやと丸く眠るわが子を膝の上に両手で抱いたまま、「ああ、つらかったなあ……」と。それは、しばらく流れが止まっていた深い川底にある、大きな

石にひっかかっていた水泡が、川が流れはじめた拍子に、ゆら、ゆらゆらと、ゆっくり、徐々にふくらんで浮かびあがり、川面で音なくはじけた。そんな感じでした。

それまでは、地震にまつわるできごとが新聞に記載されていても、見出しが目に飛び込んでくるだけで、自分の意志で読もうとは思いませんでした。もう忘れてもいいじゃないかと、断片的に浮かぶシーンを頭の中で打ち消しました。テレビやラジオでは聴くことはできても、何もできなかったじぶんを思い起こすたびに言葉も感情も抑え込んでいました。

ところが、一旦言葉に出してしまうと、1月17日がやって来るたびに、あの日、あのときのことをあらためて思い出し、言葉にも涙にもできるようになりました。それ以来、1月17日は心情や環境を振り返り、年々変化していることに気付く大切な日になりました。

戦争の惨禍は世代を超えて

キッズサポートシステムKissでは、愛着形成を目的とした0歳児の親子を対象としたタッチケアと、発達のがかりな親子のためのレインボーカフェという名の相談室の二つあります。私はそこで親子の声を聴かせていただいています。

相談室を開いて2年目、わが子を叩くというママが私のもとにやってきました。

話を聴くほどに、彼女が子どもに言っている一言一言は、決して子どもに向けて言っているものばかりではないことがわかりました。彼女のことを娘だとは認識できないくらいにお酒におぼれ、もう話すこともできなくなってしまった入院したままの父親に言いたい言葉でもありました。

わが子の姿に父親を重ね、どうにかしてあげたいという彼女の願いが、子どもを叩くという行為になっていました。

そして、彼女も彼女の父親も、そして父のまなざしの中に別のひとがいることを知りながら夫婦になった母親も戦争の被害者なのだと知りました。

惨禍がもたらした苦しみや悲しみは怒りとなり、カタチを変えながら世代を超えてあり続けているのでした。

愛着形成支援の手法を被災地で生かす

2011年3月11日、地震の記憶を自分の身体はなかなか忘れてはいないことを知りました。そして被災したにもかかわらず、「じぶんはまだ大丈夫」と、その地で支援者になる人の疲弊を想像しました。また、阪神淡路地区での孤独死、自殺者、不可解な事件がよみがえりました。

災害がもたらす多くの苦しみと痛み。カタチを変えて子どもたちに向かいませぬようにと考えました。

その年の9月の最終週、わたしは愛着形成支援のひとつの手法であるタッチケアを携えて、東北沿岸部の営業所5箇所をヤクルト本社の企画に基づいて訪問し、セミナーを開催しました。

セミナーの最中、会場が一体となり、喜びや驚きの声があがりました。こちらをじっと見つめる目がありました。「人は、真に危機的な状況に陥ったとき、自分の知的ポテンシャルを総動員して、どうにか日々の仕事を、生活をできる限り平穏にしようとして、笑顔が浮かぶ」。まさしく、その状況です。

しかし、メッセージがちっとも落ちていかない、まるで言葉が頭の上をすべっていくような会場もありました。とっさに一番近くのママの手を取り、手と腕のタッチケアをしました。するとそのママの表情がゆるみ、「先生、わたし、ほんとうにがんばってるよー」と、言葉と一緒に涙があふれました。

セミナー終了後の帰り際、「いま、子どもが愛おしくて仕方がない」と、帽子を深々とかぶって涙ぐむ表情を隠しながら、わたしに教えにきてくださった母親がいました。「災害時、一時的に愛着が深まる」という言葉を思い出しました。

そして1ヵ月後、再訪を必ず実現したいと思う、こんなメッセージが届きました。

「願いをカタチに」

セミナー後、保育士はもとより参加したスタッフからもたくさんの感謝の言葉を聴くことができました。震災後、心の中に溜め込んでいたモヤモヤや、将来への漠然とした不安感を拭うきっかけになったのだらうと感じています。(中略)あれから7ヵ月が経過しました。世の中の空気も、人の関心も、気持ちも徐々に変化しているように感じます。皆の記憶からも震災の記憶が過去のものになろうとしています。一方で、震災がもたらした現実の重さと悲しみに身動きできずにいる人がいます。被災地では親を亡くした子どもがいて、子どもをなくした親がいて、未だ故郷へ帰れない方々もいます。「ガンバレ」では済まない、希望の見えない人たちがいます。わたしたち自身も、被災地のため、社会のため何ができるかを真摯に考える時期にきています。今回、セミナーにきていただいた皆様のように、想いをカタチにできるよう、勇気をもって前へ進んでいきたいと考えています。そして、以前と同じような美しい東北を、温かい故郷を再生していきたいと強く思っています。

真の復興を目指して

本当の復興とは、小さな復旧ではなく、被災された人々がしなやかな身体を取り戻し、自分の言葉を構築してこそ。しかし《悲しみ》はそのひとだけのものであって、パンドラの箱はこじ開ければ壊れます。そのひとの大切なオルゴールのねじが壊れないようにゆっくり巻かれ、一緒に聴いてくれますかと、そっと開けられる日が来ることを願いつつ、2012年6月9日、言葉による広島と福島を支えあいのネットワーク構築を目指した取り組みの協力依頼を持って、福島ヤクルトを訪問し、2012年度は9月と10月と翌年の3月に、福島市の放射線被害を受ける土地でワークショップを開催することが決まりました。

「この瞬間に集中したい」

再開の喜び、社員の家族を想う社長のご姿勢、ふれたらすぐに涙がこぼれそうなのに、プライド

を保ちつつご対応くださる常務に課長。失ったものの悲しみや底なしの不安を抑えつつ日常に目を向けようとする女性スタッフ。過去を振り返れば災害で失った辛さが将来に思いを馳せれば底なしの不安が襲う。

だからこそ、いま、この瞬間に集中したい。「ちょっと疲れただけ」と、ひと休み入れればひどい状態。どうやったら、ぷつんと糸が切れることなく緩められるのでしょうか。

(6月9日手記より)

2. 「本文」より

ここでは、広島のみなさまから頂いたメッセージと、福島のみなさまから頂いたメッセージと、そのメッセージへを受けた人々、および私のメッセージを記載しています。

その中から、いくつかご紹介します。

(1) 「《かすかな記憶》広島より」より

聴いてあげたかった

むしろ聴いてあげたかった。

じぶんに聴ける度量が整ったとき、

話してくれる親はもういません。

どんな想いで

私を原爆の惨禍のあの後に産んだのか、

どんな思いがあったのか、

話してくれとは言いません。

聴いてあげられればよかった。

いまさらながら、そう思います。

「この年齢になってようやくそう思います」と、60代の印刷会社の社長が、わたしの取り組みを知って、即座によどみなく話された言葉です。

被爆された方が、何も語らずにお墓に持って入ってしまった理由は、決して被爆した個人に科せられるものではなかったはずです。

わたしの父は京都の壬生で生まれ育ち、小学校四年生の時に戦後の混乱で両親を亡くしました。その前後のできごと、地域のひとへの感謝、雪深い地に預けられた妹たちへのことを、東日

本大震災の2か月前のお正月に、父は四年生のわたしの息子に話していました。わたしも初めて聴きました。

わたしは10歳の息子と、10歳だった父の「母親」として聴いたのでした。

蛇がかえった

爆心地からそれほど遠くない

国泰寺というお寺で

原爆の落ちたその秋に、

蛇がかえったとききました。

あの惨禍の中でも

ちゃんと生き延びた命があるんだと

子ども心に「すごいなあ」と

おもったことを思い出します。

国泰寺は広島ランドマークとなるお寺です。爆心地から500メートルの場所にありました。第二次世界大戦後、再開発が進められる際、現在の西区に移転しました。旧地には広島全日空ホテルが建設されています。

この話は、民生委員をされている女性が、愛着形成支援にかかわるお話をしたあとに教えてくださいました。

民生委員の全国大会に行くと、原爆被害者の支援はどうなっているのかとよく尋ねられるそうです。「広島の外のひとのほうが、広島原爆への関心が高いんだなあって……。広島では、原爆のことがいつもそばにありすぎて、普段のものになってしまっているんでしょね。

(2) 「ひっそりと」福島でのワークショップより

「わたしたち、花に飢えているんです」

初日の伊達市でのワークショップの際、さし出したミニブーケを受け取られた女性の言葉です。

花を摘むことも、育てることもできない。花を飾るのは諦めるという日常。小学生の胸には放射線量を測るガラスバッジ。畑には雑草とカ

ラス。

「わたしたち、花に飢えているんです」

線量計の数値よりも、はるかに現実が見え
ました。

内部被ばく

食べものに関してだけは気をつけている。

「食」は毎日のことです。

少しでも安全で安心できるものを選びたい。

選び出すときりがないけど……。

放射能に

色がついていたらいいのに。

吾妻小富士が青空の手前にきれいに見える澄
みきった空気の日、運転してくださっていた女
性が、昼食前に空を仰ぎながら「色がついて
いたらいいのに」と、おもいきったように言いま
した。

わたしの口に入るものは何でもいい。だけど
子どもの口に入るものは品質表示をしっかり見
ている女性が食品売り場に大勢いました。

福島駅では県外産をうたう野菜が並び、お弁
当売り場でも県外産のお米の名前が貼り出され
ていました。

誰のために？

手洗い頭洗い

しっかりすれば

大丈夫。

その報道は誰に？

ここには

ハリットルの水しか

ないのに。

子どもが腕から落ちそうになって

大きく揺れて、私の腕の中から子どもがこぼれ
おちそうになったんです。

保育室の子どもを順番に外に連れ出そうと、揺
れの中、とにかく子どもを抱いて階段を下りたん
です。

そのとき、腕から子どもが落ちそうになって、
とっさに“ドスン”としりもちをついて、

そのまま、子どもを抱いたまま階段を数段落ち
ました。

子どもを落とさなくてよかったって、怖くて泣
きたくて、だけど泣けなくて、しばらく立ち上が
れなくて

あの日、家に帰ってからようやく痛みに気づき
ました。

腰や足に大きなあざが出来ているのを知りま
した。

あの日、次の日も、その次の日も、

わたしは子どもが腕の中から落ちそうになっ
たあの瞬間を夢に見て目が覚めるんです。

「あのとき、落としそうになったよね」って、
子どもはわたしに笑って言うのです。

腕からこぼれそうになったあの瞬間が夢に出
てきて目が覚めるんです。

そのたびに、子どもは腕の中にいたって、じぶ
んに言い聞かせています。

(3) 「《ゆる、ゆるゆると、音、うまれる》」 より

ぜひ、春に来てください

桃の花はピンクの桜の花よりも

ずっと濃くてきれいです。

桃並木がずーっと続く光景は、

うっとりするほどです。

まるで物語の中にいるようです。

桃源郷です。

去年は異様な光景でした。

木肌をむかれた柿の木があちこちにありました。

ちょうど去年、寒くなりはじめたこのころ、

農家の人たちは桃と柿の洗浄をしました。

葉っぱを一枚一枚

高圧洗浄機で洗ったんです。

桃はよかったのですが、

柿は木肌をむかないと洗浄できませんでした。

冷たい水をたっぷり使った作業でした。

ずいぶん堪えたと思います。

「来年は食べられる」

そう信じるために作業をしたのです。

やるべきことをやって、

栽培をやめた農家もあります。
身体にも心にも、かなりこたえたんです。

空の澄んだきれいな日でした。一区間の料金が日本一高い鉄道の「保原駅」の2階でワークショップを実施した帰り道に教えて頂きました。

「この鉄道は、春のためにあるようなもの。どんなに料金が高くても、桃並木は見事なんですよ、ぜひ春に来てください」と、春の光景を思い浮かべながらお話ししてくださいました。

今年の桃は、流通することはなく、桃農家をやめられた方もずいぶんとおられるそうです。

いじめ

他府県に避難したら
「ほうしゃのう」
と言われた。
帰ってきたら
「逃げた」
と言われる

こんなときにもいじめが起ると、小学生と中学生の子どものいる方が話してくださいました。

「きっとみんな、いつも放射能という目に見えない恐怖にさらされ、もやの中を歩き続けている感じなんですよ、本当はね」「津波の被害に比べたら、わたしはまだいい」という気持ちに、言葉をのみこむひとがいっぱいです。

祝 福

赤ちゃんがいることがわかったのは地震直後
「赤ちゃんができた」と言えなくて
4月になってようやく言葉にした。
「大丈夫なのか？」
「生んでいいのか？」
ご心配ありがとう。
だけど
ほんとうは
わたしはもっと
祝福されたかった。

3月11日の直後に、3人目の子どもがお腹にいることがわかった方が、ワークショップ後、駐車場ではっきりと話してくださいました。

あのとき、誰にも妊娠を祝福されなかったこと、それどころか、まともな子どもが生まれるはずがないと言われ続け、生まれてくるまでずっと不安で不安で仕方がなかったこと。正気でなんていられませんでしたとも。

「11月に子どもが生まれ、いま、まさに0歳児の母親ですが、わたしはこの福島のこの地で生み育てることを決意しました」と胸を張って話されました。「まだまだ話したいことが、伝えたいことがいっぱいあります」とも。まっすぐな視線が忘れられません。

かあさん、すなあそびってなに？

「この言葉を聞いたときはショックでした。水遊びもさせていません。この辺りの3・4歳児は三輪車をこいだことはありませんよ」と、小学生と幼稚園に男の子のいるママ。

子どものいる家庭には、必ずレゴブロックがあり、できあがった作品が増えて、玄関の下駄箱の上にまで飾るように。

砂場の砂を入れ替えても、どんどんたまる放射能。いろんなところにホットスポット。見えないのですべてを禁止せざるを得ない。

最善の選択かどうかはわからない。私は放射能をかぶってもいいけれど、子どもは大人が守るしかないのです。

土、風、水、緑……命あるものに触れる喜びを、命の尊さを、子どもたちに伝えてやりたい。

(4)「《音、きこえた》—福島と広島と、あのときのこと」より

なにもできなかった

あのとき、
わたしは具合が悪くて家で横になっていました。
家には夫と息子がいました。
だから、ゆれていても安心でした。
妹は学校だから安全かなと思いました。

——迎えに行かなかったのです。

夫と息子がテレビを押さえているのに、
わたしはいち早く外に逃げ出しました。
子どもを置いて逃げたのです。

——ひどい母親です。

自分のことで精一杯だったじぶん腹が立ちます。
後悔ばかり残っています。

放射能の雨をかぶりました

何回かの余震のあと、
車でおばあちゃんを連れて家に戻りました。
帰り道でもまだ何回も地震があり、
怖くて仕方ありませんでした。
家に帰って、まずしたことが、
車のガソリンと灯油の買い出し。
それから家にあるモノで
遅い夕飯をみんなで食べ、
夜遅くにパパが帰ってきました。
父さんは会社で社員の安全確認をするので
家にあるお茶や食べものを持って、
また行ってしまいました。
それから何日泊りがけだったかな。
家を守ったのは私と母と子ども。
父さんがいない中、
たった五人でがんばったんです水を汲みました。
スーパーが開いていると聞いたら
買い出しに行きました。
放射能の雨を
かぶってしまいました

疎外感

震災を経験していません。
あるとき他県にいました。
だから、
みんなと心が一つになれないような……。
みんなも家族も大好きです。
楽しいです。
だけど
淋しいです。

(5)「《ひびけ》——あなたへ」より

みなさまへ

わたしのまちを忘れないてください

あの大きな大きな災害のあと
たくさんのお別れを経験しました。
でも、家族がみな、無事でいてくれたこと
本当に良かったと思っています。
浪江は 死んでいない
浪江は よごれていない
みんな、帰るために頑張っています。
どうか浪江を忘れないで！
バイキン扱いしないで！

誰が見ても判断できる材料を

36度「安心（ニコリ）」
38度「あら、大変！」
普段から目にする数値であれば、
誰でも容易に安全か危険かを判断できます。
原発事故以降に目にする数値は、1年7ヵ月た
っても、はたして安全なのかどうか わからない。
現に子どもが行った「ガラスパッチ」「甲状腺
検査」「ホールボディカウンター」
どれをとってみても、全くわけのわからない言
葉と数字たち……。
何と比べて、どう安全なのか、
さっぱりわからない。
この先、ずっと福島で生活していく私たちに
素人が見ても安心安全、
不安危険が判断できる材料を
もっと提示してください。

本当のことが知りたい

福島の人は、
すべて内に隠し持っています。
口にしても仕方がない原発のことです。
少ししか伝わらなくてもいいので伝えたい。
福島の子どもたちは大丈夫なんですか？
本当のことが知りたいです。
「わからない」って言うばかりでは
何も聞けません。

広島へ

子どもたちはいま、
大人たちもいま
社会の中で不安と共に生きていくしかない。
3. 11の地震の前の福島は何事もなく、
災害なども少なく、
すごく幸せな毎日を過ごしていました。
それが今では
崖がちから突き落とされたようです。
いろいろと励ましを頂きました。
そのときはすごくうれしい、
とても感謝をしています。
だけど、なぜか、
この先どうなるのかなあと
自然と涙が出るのです。
——別にすごく大きな災害に遭ったわけではないの？
これが心の傷として残っています。

3. 「エピローグ」より

エピローグは、「気持ちの翻訳」「ぜったい迎えに来てね」「緊張した大人との関係の中で」「言葉に言葉を足したり引いたりしながら」として考察をしています。ここでは、最後の「言葉に言葉を足したり引いたりしながら」を掲載します。

言葉に言葉を足したり引いたりしながら

未熟な子どもは、言葉だけでなく身体全体を使って大人に伝えようとします。大人は子どもの言葉に言葉を足したり引いたりしながら、その子どもの本当に言いたいことを言葉に翻訳します。

わたしも、愛着形成支援者として、乳児や障害のある子どもの言葉や行為を近くにいる母親や先生に翻訳したり、あるときは母親の気持ちを言葉にして先生に伝えてきました。

そして、今回、放射能の不安がずっとあり続ける地域の人々の声を、呼吸のようすやまなざ

しの向きからわたしの身体が感じ取ったことを即興的に書き綴った手帳の記録を言葉にしました。また、ワークショップで出会った女性が書き綴ってくださったものをそのまま、あるいは二人以上の言葉をあわせて言葉にしたり、筆跡からわたしが感じとれることを足したり引いたりしながら形式にとらわれずに言葉にしました。当事者だからこそ言葉にできないことや、なりにくいことも、できる限り翻訳しようと努めました。当事者ではないからこそできること、見えてくるものが確かにあったという実感があります。

この福島と広島の声をあせたアンプロンプチュを、他の誰でもない「あなた」に届けます。

Ⅲ おわりに

福島のその場所に足を運び、その状況をこの身体で感じ取ったこと、聴いたことが、いつもわたしに語りかけてきます。「この言葉、伝わりましたか」「このしぐさ、読み取ってくれましたか」と。

福島ヤクルトスタッフの方々まなざしやしぐさは、言葉以上にわたしに語りかけ、浮かんでは消え、浮かんでは消えてをくり返します。とくに子育てをしている母親世代の方々から頂いた「たくさんのひとの声を聴いて発信してください」というメッセージに、声に出して言えないことがどれほどあるのだろうかと思いがふくらみ、切なさや怒り、諦めや決意という感情に包まれます。

彼女らのその声を言葉にすることは、当事者ではないわたしには難しい作業でしたが、当事者ではないからこそ見えたこと、言葉にできたことがあることを信じて書き綴りました。

尚、この冊子は3月1日発行されました。

ぜひ、あなたの大切な声をお寄せください。